

0340

軍事初傳

林參政第一九四號

訓示布告送付、件通牒

昭和十七年八月二日

第十五軍參謀長諫山春樹

陸軍次官水村兵太郎殿

首題、件別冊、通各三部送付シタルニ付通牒ス

四五三

17 8.12

17830 軍事課

訓示

八月一日開廳式當日
 行政府職員ニ對シ

曩ニ中央行政機關設立準備委員會
 ヲ設ケ其委員長以下ニ「バーモ」博士其他
 ヲ任命シテヨリ約ニヶ月此ノ間委員長以下
 ハ精勵克ク其任務ヲ完ウシ茲ニ芽出度
 行政府ノ設立ヲ見軍政段階ニ更ニ一躍進
 ヲ示スニ至レルハ緬甸ノ爲將又大東亞ノ爲
 欣快ニ堪エサル處ナルト共ニ委員長以下ノ鏤

骨ノ苦心ト努カトニ對シ此ノ機ニ於テ敬意ヲ
表スルモノナリ

本日此ノ輝カシキ行政府開廳ノ式典ヲ與手ケ
ルニ際シ行政府職員一同ニ對シ予ハ緬甸軍
政ノ最高指揮者トシテ一言ス

世界ノ情勢ハ諸子ノ知レル如ク樞軸反樞軸ノ
兩陣營ニ分レ共ニ國カヲ傾ケテ相爭ヒ未曾
有ノ深刻性ヲ露呈シ來レルモ樞軸側ノ優勢
ハ日ト共ニ確實性ヲ増シツツアリ即チ東方

ニ於テハ我大日本帝國ノ南方經營ハ神技ノ如
 キ精確サヲ以テ着々進展シ重慶ノ困窮ハ日
 ト共ニ倍加シ占領地ニ於ケル軍政ハ馬來、比
 律賓、[「]ジャワ[」]、[「]スマトラ[」]、[「]ボルネオ[」]、[「]ニュー
 ギニア[」]何レモ豫期以上ノ成果ヲ擧ケ大東亞
 共榮圈ノ基礎ハ既ニ確立セラレタリ 一方西方
 ニ於テハ獨伊軍ノ春季攻勢ハ目下[「]モスクワ[」]正面
 及北阿方面ニ破竹ノ勢ヲ以テ進展シツツアリテ我日
 本ノ東洋ニ於ケル完全ナル勝利ト相應シ英米陣

營ノ全面的敗色蔽フ可カラサルモノアルハ彼等從來ノ
積悪ニ鑑ミ世界正義ノ爲人類福祉ノ爲諸子ト
共ニ真ニ慶賀ニ堪エサル所ナリ
予ハ本次戦争ノ勝利ヲ確信シテ疑ハサルモノナリ
行政府ハ實ニカル客觀的狀勢下ニ誕生シタリ
即諸子ハ常ニ克ク此ノ世界動乱ノ中ニ於ケル緬甸
ノ地位ヲ正シク認識シテ行動ノ基調ト爲スヲ要ス
假令砲聲ハ聞エストモ世界ヲ二分セル大戦争ハ凡
ユル手段ヲ以テ目下熾烈ニ繼續中ナリ

而シテ大東亞戦争ノ終局ノ勝利ナクシテハ實
ニ亞細亞ノ復興ナク緬甸ノ獨立モ亦幻影ニ過
キス

本日行政府ノ設立ニ方リ予ノ再ヒ聲ヲ大ニシ
テ言ハント惣スル所ハ緬甸人ハ固ヨリ全亞細亞
ノ民衆ハ大東亞戦争ノ完勝ノ爲一切ヲ集中
セヨトノコトナリ

「勝利ノ爲ニ一切ヲ」是レ吾人ノ覺悟ナルト共ニ
又實ニ諸子ノ覺悟ナラサル可ラス

諸子ハ緬甸民衆ノ指導者トシテ 行政府ニ於テ
執務スルニ方リ何ヨリモ先ツ此ノ世界認識ノ上ニ
立チ自己ノ行動ヲ律スルヲ要ス 此ノ自覺ニ
缺如スルモノハ行政府ノ官吏タルノ資格無キモノ
ト言ハサルハカラス

次ニカ、ル非常時局ニ於テ如何ナル國家ニ於テモ
常ニ齊シク要請セラル、所ノモノハ舉國一致ノ態
勢之ナリ我日本ニ於テモ久シキ傳統ヲ有セル
政黨ハ昨年悉ク解消シ一國一黨ノ状態ニ變レ

リ、緬甸モ亦宜シク此状態ヲ正視スヘキナリ蓋シ
 派閥ノ争鬪ノ極ル處遂ニ國家全般ノ休戚ヲ度
 外視スルニ至ルコトアルハ勢ノ然ラシムル所ナルヲ以テナ
 リ從來緬甸ノ獨立ヲ阻害セル因一ニシテ足ラサル
 ヘキモ國內相剋ニ依ル精カノ分散ハ實ニ有カナル
 一因タリト言フヘシ印度モ亦實ニ然リ斯クノ如キハ
 英國ノ高等政策トモ見ルヲ得ヘク深ク敬言ムヘキ點
 ナリトス中央政界中ニ派閥ノ争ヒアラシク直チニ
 地方ニ反映シ民衆ノ信賴ヲ繋クニ足ラサルニ至ルヘシ

諸子中央ニ職ヲ奉スルモノハ先ツ身ヲ以テ範ヲ示シ
 小異ヲ捨テ大同ニ就キ舉國一致以テ國力ノ急速
 ナル充實ヲ期スヘキナリ斯クテ亦將來獨立ヘノ基礎
 ヲ築クヲ得ヘシ

次ニ諸子ニ望ム所ハ率先民衆及地方官吏陣頭
 ニ立テ緬甸ノ爲大イニ奮勵セヨトノコトナリ

緬甸ハ戦火ニ荒サレタリ此ノ戦禍ヨリ緬甸ヲ戦前
 ノ緬甸トスルコト既ニ大ナル努力ヲ必要トス然ルニ
 更ニ大イニ民力ヲ充實シ他日獨立ノ光榮ヲ享受

センカ爲ニ緬甸人ハ茲ニ更生的奮起ヲ必要トス
全緬甸人ハ實ニ決死ノ勇ヲ振ヒ興シ緬甸ノ爲ニ
勉勵シ斃ルル迄働クノ概アルヲ要ス 我日本ハ一億
ノ人口ヲ擁シ國民ハ勤勉ニシテ朝ヨリ夜ニ至ル迄
營々トシテ働キ子供ニ至ル迄他日國家ノ爲ニ役立
ツ人トナルヘク夜モ遅ク迄勉強シアリ斯ラテ始メテ
世界列強ノ間ニ伍シテ強國タルノ地位ヲ保持ス
緬甸カ獨立ノ榮ヲ荷ヒ而カモ能ク之レヲ維持セ
ンカ爲ニハ決シテ尋常ノ覺悟ヲ以テシテハ能ハサルモ

ノナルコトヲ考フルヲ要ス 予ハ緬甸人カ獨立ニ對スル多
 年ノ宿望ヲ熟知スルカ故ニ然モ緬甸人ト共ニ之ヲ祈
 求スルカ故ニ衷心ヨリ緬甸人ノ更生的奮起ヲ希望
 シ之ニ依ル急速ナル民力ノ進展ヲ期待シテ已マサル
 モナリ

諸子ハ行政府ノ職員トシテ民衆ノ指導ニ任スルモノ
 ナリ指導ノ地位ニ在ル者ハ率先垂範、不言實行
 以テ民衆ヲ率ルサル可ラス 上ノ行ヲ所下之ニ倣
 フト言フ即吏道ヲ肅清シ清廉潔白、恪勤精勵

ナルヲ要ス斯ク、如クシテ始メテ民衆ハ行政府
ノ指ス所ニ一致邁進シ強固ナル團結力ニ基ク偉
大ナルカヲ發揮スルニ到ルヘシ

最後ニ言ス予ハ此ノ度行政府ノ若干ノ位置ニ
日本人官吏ヲ配置シタリ其ノ意圖スル所ハ日
緬官吏ノ同居執務ニ依リテ相互ニ相識リテ以テ
両民族ノ精神的ニ一致融和ノ基礎ヲ作り延イテハ
大東亞戰爭完勝ノ爲ノ施策ニ一點ノ虚隙ナカ
ラシメンコトヲ期シ一方技術其他凡ユル部面ニ於テ

我日本カ緬甸ニ比シ一日ノ長アルニ鑑ミ誠心緬甸人
ヲ指導シ其ノ躍進ニ貢獻セシメントスル好意的配慮
ニ外ナラス

予ハ全部ノ緬甸人カ日本人ヲ親愛シ之ト衷心ヨリ
融合シ相共ニ携ヘテ緬甸ノ發展ニ邁進センコトヲ
望ミ特ニ諸子カ真ニ予ノ意志ヲ諒解シ先ツ
行政府ニ於テ其ノ好模範ヲ示サンコトヲ切望スルモ
ノナリ 緬甸人ニシテ斯クノ如キ精神ヲ持スル以
上日本及日本人ハ永遠ニ緬甸ノ友ニシテ 予モ亦

緬甸ノ爲ニ援助シ之ニ力ヲ藉スニ吝ナラス

重大且困難ナル時局ニ際シ職ヲ中央行政ノ部
 門ニ奉シ新興緬甸建設ノ任ヲ負ヒ一面戦争完
 勝ノ爲ノ要求ニ應ヘンカ爲諸子ノ責ハ重大且大
 ナリ宜シク自重自愛渾身ノ力ヲ振ヒテ職責ニ
 勉勵センコトヲ期スヘシ
 右訓示ス

昭和十七年八月一日

緬甸方面日本軍司令官 飯田祥二郎

軍司令官布告

予ハ曩ニ「バーモ」博士ヲ委員長トスル中央
 行政機關設立準備委員會ヲ組織シ中
 央行政機關ノ設立準備ニ當ラシメタルモ委
 員長以下ノ熱心ナル努力ニ依リ逐次之カ準
 備ヲ完了セルニ至レルヲ以テ茲ニ「バーモ」博士
 ヲ行政府長官ニ任命シ本日行政府各部
 長官以下ノ重要職員ノ任命式ヲ舉行シ

行政府ヲ開廳セシメタリ

顧レハ二月中旬舊英總督ノ上緬甸退避以來
 緬甸中央行政機構ノ機能ヲ喪失シテヨリ茲
 二五ヶ月完全ニ英國ノ羈絆ヲ脱シ緬甸人ノ
 行政府ヲ日本軍軍政統治下ニ樹立シ以テ
 緬甸建設史上ニ不滅ノ足跡ヲ印シタル次第ニシ
 テ緬甸今後ノ發展ノ爲誠ニ慶祝ニ堪エサル處

ナリ

惟フニ今後行政府長官「バーモ」博士以下各

官ノ奮勵努力ニヨリ治安ノ恢復戰禍ノ復舊
 一般民衆ノ福祉ノ増進期ニテ待ツヘキモアラン
 予ハ軍政施行ニ當リ行政府長官以下ノ手
 腕ト熱意ニ格段ノ期待ト信賴ヲ懸ケアリ
 一般民衆亦行政府ニ全幅ノ信賴ヲ寄セ官民
 一體トナリ舉國一致以テ新興緬甸ノ建全ナル
 發展ヲ期スヘシ
 尚予ハ此ノ機會ニ方リ緬甸獨立ノ問題ニ關シ
 一言ス

緬甸ノ獨立ハ民衆多年ノ熱望ニシテ予ノ熟知
 スル所ナリ 然シテ又我大日本帝國東條首
 相ノ聲名セル所ニシテ此ノ趣旨ハ本日ニ至ルモ何
 等變更アルニトナシ 然レ共獨立實現ノ爲ニハ
 緬甸人カ銘心スヘキニ大要件アリ
 即其ノ一ツハ緬甸人カ戦争ノ勝利ノ爲ニ過去數
 ケ月ニ亘リ示シタルト同等又ハ夫レ以上ノ熱烈ナル
 協力ヲ日本軍ニ致スコトニシテ他ノ一ツハ緬甸ノ民
 カヲ急速ニ且ツ充分ナル程度ニ充實スルコト之

レナリ第一ノ要件ニ就キテハ多クヲ速フルヲ要セ
 サルヘキモ大東亞戰爭ニ於ケル我大日本帝國ノ
 終局ノ勝利無クシテハ亞細亞ノ復興モナク勿論
 緬甸ノ獨立モ無シ緬甸人ハ能ク此ノ大局ノ理ヲ
 諒解シ戰爭ハ日本人ノミナラス緬甸人モ共ニ闘ヒ
 ツアルトノ觀念ノ下ニ何ヲ措キテモ我等ノ戰爭ノ
 完勝ヲ第一義トシ完全ナル協力ノ實ヲ示サンコ
 トヲ望ムモノナリ次ニ第二ノ要件ニ就キテ速ク
 抑ク一民族カ競争激甚ナル此ノ世界リノ内ニ於テ

獨立國家ヲ形成センカ爲ニ六國力ニ於テモ 將又
 武力ニ於テモ相當ナル實力ヲ備ヘサルヘカラサルコト
 ハ誰人ト雖諒解シアル處ニシテ實力ノ養成コソハ
 獨立獲得ノ爲ノ基礎條件トス 即全緬甸人
 ハ此ノ際奮起一番眞ニ更生的努力ノ精神ヲ
 振ヒ興シテ緬甸ノ爲ニ働キ以テ實力ノ涵養ニ
 邁進スルヲ要ス 特ニ緬甸ハ今次戰爭ノ慘禍
 ニ遭ヒ之カ復舊ノ爲ニモ特別ノ努力ヲ必要トスルニ
 加ヘ尙未タ戰爭ノ渦中ニ在リテ之カ遂行ノ爲ニ

之當然大ナル負擔ヲ負ハサル可ラサル狀態ニ在ル
 ニ於テ然リトス 予ハ緬甸民衆ノ並々ナラヌ前途
 ノ苦難ニ對シ深キ同情ヲ寄セサルヲ得サルモノナリ
 然レトモ凡テ困苦ヲ克服突破シテ後ニ始メテ強キ精
 神ハ生レ光明ノ彼岸ニ至リ到達シ得ヘシ 現在ノ狀
 態ニ於テハ着實ナル努力ヲ以テ實ニ緬甸獨立ノ鍵
 ト言フ可シ
 予ハ緬甸人カ以上述ヘタルニ大要件ノ線ニ沿ヒテ
 一路邁進セシトテ期待ス 然シテ緬甸人カ其ノ方

向ヲ誤ラサル限リ予ハ凡ユル部面ニ亘リ爲シ得ル限
リノ援助ヲ與ヘ以テ緬甸人ノ希望達成ニ協力スル
ノ勞ヲ各マサルヘシ

今次行政府ノ設立ニ方リテモ予ハ緬甸人ノ精神
ヲ尊重シ忝スヘキモノハ成ル可ク之ヲ緬甸人自身ノ
手ニ委シ緬甸人ニ依ル緬甸ノ政治ヲ行ハシメント欲
シ其ノ趣旨ハ行政府ノ機構中ニモ將又地方行政機
構中ニモ努メテ之ヲ具現セル所ニシテ今後ニ於テモ前記
二大要件實行ノ實績ニ照ラシツツ逐次緬甸人ノ

欲スル方向ニ進メ度キ意向ヲ有ス

民衆ハ能ク日本及日本軍ノ信義ニ信賴シ前途

ニ於ケル更ニ輝ク光明ヲ目指シ心ヲ安ンシテ現實

ノ健全ナル歩ミヲ歩マンコトヲ期スヘシ

右布告ス

昭和十七年八月二日

緬甸方面日本軍司令官 飯田祥二郎